
星海に希望を

マックスウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星海に希望を

【Nコード】

N8363W

【作者名】

マックスウエル

【あらすじ】

宇宙暦10年。荒廃した地球から開拓隊が発発する。宇宙の危機にも陥らず、惑星開拓と植民、異星人接触と同盟、地球連邦成立など地味な宇宙開拓モノをオリジナルキャラクター多数でスターオーシャン4の二次捜創作です。

1話

「32年前、人類は三度目の過ちを犯し地球は徹底的に焼き尽くされた。人類は地下に潜り二度とこのようなことをしないと誓い拡大連邦を発足し生き延びるために彼らは安住の地を、希望を宇宙に求めた。

そして今から十年前、国際科学技術局のバークスタイン博士が超高速航法を成功させ、人類はついに光の壁を越えることが可能となり、宇宙探索が可能となった。

その第一次宇宙開拓調査隊である諸君らが果たす責務は人類史に残る文字通り前人未踏の領域に踏み込むことであり、また荒廃した地球に住む全ての者たちの希望である。

諸君らは人類の希望であり、これからの人類の行く末を決めるものである。ここムーンベースから飛び立つ諸君らの成功を期待する」

ムーンベース司令官であるケニー司令の出港式演説が終わった時、SRF（宇宙開拓隊）宇宙船一号機通称カルナスのラウンジにある巨大スクリーンでそれを見ていたエッジ・マーベリックは宇宙に飛び立つ緊張と興奮に満たされていた。それはSRF参加者全員が共有していることだった。

月軌道上にある宇宙基地ムーンベースでは、全ての準備が整えられた5つの宇宙船が乗組員と共に出港を待っていた。

「いよいよだな。そのために訓練してきたんだ。」

乗組員たちは隣にいる者としきりに話しかけて、それは5つの宇宙船全てに共通することであり訓練で隅々まで知り抜いた絶対の信頼を置く船がついに任務を果たす時が来たという努力が報われる興奮でもあった。

「いよいよ出港ね」

S R Fでの何十人目かの会話がラウンジの椅子に座っていた髪を後ろで結った女性から発せられた。

「ああ、いよいよだ。訓練から2年、ついにその時なんだ」

金髪の青年は答えたが、周囲にいた連中もいよいよだなと声を掛けてきて、それが繰り返されるものだから困ってしまったが、皆が同じ気持ちであることがわかり、さらに興奮してしまう。

「1年ここで生活して馴れてしまったけど、星空は変わらなかったけど、それが変わるところまで行くのね」

「超高速通信があるから連絡は途絶えないだろうが、何かあっても救援は来ないからな」

「そのために訓練したんだろうが、不測の事態に備えて戦闘から整備まで全員出来るようになったんだからさ」

「新しい場所に行く興奮と去っていく寂しさというのかな。でもなんかこういう会話出発前って感じで良いね」

「エッジ、いつまでもガヤガヤやってたんじゃ駄目だ。号令掛けてくれ」

「よし。さあ、みんな、出港の最終チェックだ。持ち場に着いてくれ」

エッジの号令で雑談に興じていた乗組員たちはそれぞれの持ち場に戻っていく。エッジたちも艦橋に向かい出港待機である。

艦橋ではそれぞれが指定席で最終チェックを行っている。

火器管制官のタニス・ウッズはこのカルナス乗組員内では最年少の18歳で陽気な性格をした見た目も少年らしい青年である。彼が隣の冷静な機関監督官のディック・ストラウスに話しかけていた。

「これから向かう惑星エイオスは無人探索機からの情報で大気もある生存可能惑星だって分かった時は大騒ぎになったけど、なんで最初に向かうんだ？もっと先を調べるために俺たちが組まれたんだろう？」

「いまさらそれを言うのか、君は」

「超高速航法可能な宇宙船は5隻しかないのに全隻全部が向かうのは変だなんて思ってたね。バラバラの方向に向かうって選択肢もあったと思うからさ」

「USTA（国際科学技術局）がSRFに掛けた保険さ。目的地の場所が分かっているということもあるが、宇宙じゃ何が起るかわからないから不測の事態で全隻失われる可能性がある。だから最低でもエイオスにまで到達してSRFは功績を挙げたということにしたいのさ。全人類の希望なんだというが連邦事業だから期待も大きく巨額の国費が注ぎ込まれているから何の成果もなく失敗したでは済まない。だから全隻でとりあえずエイオスに行くのさ。わかったか？」

「だから僕たちの本当の旅はエイオスに着いてからさ。生存適応調査が済めば、だけどね」

艦長席のチェックを済ませたエッジが自席に戻るついでに二人の席に近付いて会話に割り込んだ。

「タニスの言う通りそこを拠点にバラバラに進むらしい。アキュラは北天体、バレーナは南天体、カルナスは東天体、バンデリオンは西天体、エレミアはエイオスで開拓基地任務が割り当てられている」

「エッジ。アキュラから通信。クロウから」

通信官のレイミ・サイオンジが通信席からエッジを呼んだのでレイミの席で通信を取る。

「よつ。エッジ、レイミ。そっちの調子はどうだ」

通信画面に赤毛の青年が映し出された。軽口を叩いてはいるが年齢はエッジたちとさほど変わらずその表情には自信と責任感が滲んでいる。

「副長如きになんのですか？アキュラ船長クロウ・F・アルメデイオ殿」

慇懃に答えるエッジにレイミの横槍が入る。

「負けず嫌いのエッジは同率主席だったのにクロウが船長になっち

やったからちよつと気にしてるのよ。だからクロウ、気にしないでね」

「ちよつとレイミ！」

「そうだったのか！最近お兄さんに冷たいから寂しくて泣いてたよ」

「その嘘泣きやめるよ。妙に苛つく」

エッジが煩わしそうに言い返すとクロウはさっきまでの明るいトーンから真剣な声になっていた。

「そんなに俺が船長になったのが気に入らないのか？」

「クロウが船長になったことは素直に嬉しいと思ってるよ。ただ子供の頃からずっとクロウには敵わなかったから今回こそはって思ってる」

「焦るなよ。俺たちに差なんてそうないぜ。このSRFは人類の希望を探す重大なものだ。船長だろ？が副長だろ？が平隊員だろ？がその責任に差はないはずだ。俺だって船と乗組員を預かって緊張してるんだ」

「そうだぞ。マーベリック君。君も副長として私を助けてくれないければ船は動かせないのだからな。アルメディオ君も緊張するのはわかるが同郷の出身とはいえうちの副長と通信官に愚痴は言わんでくれよ。緊張が移ってしまうからな」

そう言ったのはカルナスの船長ハイビュー・グラフトンであった。彼は40歳の軍人でケニー司令が閃光のスティーヴという異名を得るに至った超高速航法の有人実験の際に母艦で指揮を取ったという傑物でありこのSRFでの実質的な現場責任者でもあった。

「すいません。軽率でした。ではこれで。エッジ、レイミ、お互い頑張ろうぜ。エイオスでな」

クロウが通信を切るのをレイミは手を振って見送り、エッジは自席である航法席に戻った。

グラフトン船長が船長席の前に立つと出港の号令を掛けた。

「マーベリック君。最終チェックはどうか」

「はい。全て完了し異常ありません」

「ではこれより出港である。各部署に伝えよ。各員出港時間である」
ムーンベースの司令室でケニーは出港の様子を見守っていた。通信士が状況を報告している。

「一号機アキュラ。二号機バレーナ。三号機カルナス。四号機バンデリオン。五号機エレミア。順次発進可能です」

「運命の子供たちが人類の希望を担い未知の宇宙に旅立つ。彼らの航海の無事を祈る」

ケニー司令が無事を祈り独語すると通信士が報告した

「一号機アキュラ、発進」

カルナスでは緊張するクルーをグラフトン船長が励ましていた。

「訓練は十分に積んだ。その通りに動かせば良い」

忙しく発進作業を行っているカルナスの艦橋でレイミが報告を読み上げていく。

「一号機アキュラ、発進を確認。二号機バレーナ、発進を確認」

航法官として船を直接操舵するのはエッジの役目だった。

「SRFスペースシップ三号機カルナス。発進！」

船長の言葉にエッジは船体を機動させ固定アームが離れブースターが点火し高加速の準備が整う。

「カルナス。発進します！」

その瞬間、電磁カタパルトから弾き出されたカルナスは宇宙に飛び立った。

ムーンベースから飛び立った五つの機影は超高速航法を使用し亜空間を纏って宇宙の彼方へ消えて行った。

2話

第三次世界大戦後人々の生活は一変した。

大量破壊兵器の大量使用により地球環境は人が生存不能なレベルにまで達してしまった。

大気が、大地が、海が汚染されたのである。

地球の50%が汚染され生き延びた人々は大戦前に作られた地下都市での生活を余儀なくされていた。

地下都市の劣悪な環境は戦災を生き延びた人々を減少させていく。閉鎖的で変わることのない生活環境が人々の生きる気力を奪ったのである。

エッジたちが育った第8地下都市は其中では恵まれた都市であった。

USTAの本部があり宇宙へ向かう気運がもつとも高まっており、それを養成する施設も整っていた。

エッジたちは地下都市の閉塞感から抜け出そうと宇宙を目指したのである。

未だ地球は海の青さを失ってはいない。大戦から30年以上が経ち大気は呼吸可能なレベルにまで回復していたが、それでもなお自然環境は過酷であった。

地球人は新たに生存可能な惑星を捜していた。その第一候補が惑星エイオスである。

SRFの宇宙船隊がムーンベースから発進してワープドライブを開始してから2日が経った。

亜空間を移動することで光の速さを超える超高速航法でさえ3日の距離にある。

乗組員たちはエイオス到達が直前に迫り、上陸に備えて会議室に集

まっていた。

ワープドライブ中は自動航行が可能なこともあり最低人員を残してほとんど全員が集まっていた。

「無人調査艇の報告ではエイオスの大気成分は地球に酷似しており入植は可能であるとされておりますが、生体走査を行った結果、巨大な動植物の存在を確認しておりそれが唯一の不安要素となっています。上陸はシミュレーターでのリハーサル同様ブルド戦闘隊長の指示に従うように」

檀上に立つレイミが司会役としてこれからのことを話していた。

座席の最前列にはグラフトン船長、エッジ副長、ダフラン戦闘隊長、ディック監督官、ハル書記官などが並んでいる。

「ブルド隊長。上陸時の説明を」

「降下後の危険度の有無で脅威存在があれば排除を行う。危険区域での探査も請け負うことになるので戦闘要員は覚悟はしておけ。以上だ」

「マーベリック副長。今後の予定を」

「あと二時間でワープアウト。降下は各船との打ち合わせ次第だが一時間後を予定している」

「グラフトン船長。何かありますかね？」

「ああ。諸君、もうすぐワープドライブを抜けて惑星エイオスに到着する。そこが人類の新天地足り得るかどうかわかめる時だ。我々SRF最初の仕事だ失敗は許されん。降下後の開拓、資源調査などやることは山積みになる。今日までの生活から一変することを再度肝に銘じて欲しい」

「では、会議はこれで解散とします。各員所定の位置に戻ってください」

「それでエイオスの土を最初に踏むのは誰なんだ？」

「何を聞いていたんだ。君は。脅威があれば戦闘隊が出ると言っていただろう。なくても護衛をやるのだから戦闘隊が最初だ」

会議室から艦橋に戻るタニスが口にした疑問にディックが答えていた。

「なにモタモタしてる。早く艦橋に行け！」

厳つい顔のダフラン・ブルドが怒鳴った。

船内では？3である戦闘隊長に怒鳴られて二人は艦橋に走って行った。

「あいつらも戦闘要員だろうに、まったく緊張感が足りんな」

「この船に乗り込んでから君も年を取った感じだね」

「若い連中がだらしないから俺が尻を叩かねばならんだ。おっさん臭くもなるさ」

船内の備品管理を行う主計官であるハル・フルブライト書記官はダフとは同年代の33歳で10代から20代の多いSRFでは年長の部類に入るために、また戦闘部隊という消費が多い部署の指揮官として何かと連絡を取り合うために親しいのである。

ハルは船の運営には関わるもののこの最初の移動中は仕事が少ないため上陸の準備も整っていたので執務室でダフと雑談に興じていた。「戦闘要員の練度、強化スーツとレールガンの数も十分。初陣で死ぬことはない」と断言できるが明確な期間が決められてないだけに不安がある」

「物資の観点からも1年が限度というところです。エイオスが地球にとつての全面的に豊穡の地になるとは限りませんが、この開拓調査の長期的な成功のためには開拓基地を作り上げて補給体制を整えられるかどうかです。船長ほど楽観的にはなれませんよ。最悪、USTAが予想したようにこれ以上移住可能な惑星を発見出来ない、到達出来ない場合はエイオス開拓に重点が置かれることになる。移民、入植を可能にする社会基盤の整備をするまでに農業、工業、エネルギープラントの生産量を気道に乗せなければ」

「それが1年」

「気道に乗せるのに最速で三ヶ月で可能だという試算は出ていますが、資源調査の結果次第では変更を余儀なくされるでしょう。それ

「が心配で」

「だが、それも取らぬなんとやらで正確な数値がわかっていない。全てはエイオスに到達してからか」

「それでも計画は立てておかないといざという時に動けないですから」

ハル・フルブライトはダフと同年であり、貧弱な容姿ながら鋭い目つきの青年であった。彼は優れた計画立案能力と処理能力を持ち、元々は地下都市の市長補佐官として辣腕を振るっていた。

しかし地下都市の生活に限界を感じて希望を求めてSRFに参加したのである。

「ワープアウトまで15分です。準備をお願いします」

レイミの船内放送がエイオス到着を告げる。

「新天地となるか」

3話

カルナスがワープアウトすると船に何かがぶつかったような衝撃が襲い、船内を包む重力がなくなり、船が激しい機動を行い多くの乗組員たちは衝撃が直に伝わり壁に吹き飛ばされてしまう。そして船内に緊急事態を告げる警報が鳴り響く。

ハルの執務室にいたダフランはぶつかった壁に対して受け身を取ったが、ハルは反応が間に合わず肩から壁に打ち付けられてしまう。ダフランは固定されていない小物類が無重力のために浮き上がったいるのを避けてハルに近づき、意識があり怪我が肩の脱臼程度であることを確認して状況を確認しようと思橋と連絡を取ろうとすると浮いている器具類が床に落ちていき、僅かに重力を感じた。その直後、警報音を破ってレイミの酷く焦った調子の船内放送が流れる。

「ワープアウト直後に隕石群に突入し船体が損傷しました。損害は不明。船は現在大気圏突入中。このままでは不時着の可能性がありますが。何かに掴まってください」

「突入だと？」

ダフは各部屋に備え付けられた救命キットを持って、ハルを抱えて固定された机の下に潜り体を固定した。

「すまんね」

「不時着で死ぬのはごめんだからな」

それは五隻の宇宙船がワープアウトした直後に起こった。

亜空間から通常空間に戻り船の外部カメラが惑星エイオスを確認した直後、レーダーがワープアウト地点に大小数百の隕石群がすぐそこまで迫っていることを示していた。

「隕石群多数！？エッジ、ここにいたらやられちゃう！」

レーダーを見ていたタニスが叫んだ直後、船体に衝撃が走り今まで体を床に引っ張っていた力がなくなった。

「重力発生器に異常発生。損傷した模様」

一瞬混乱した艦橋スタッフはディックの落ち着いた声で機関状態の報告した事で我に返り、グラフトンが命令を下した。

「サイオンジは安全行路を算出！ウッズは衝突する障害を破壊！ストラウスは機関制御！マーベリックは船を離脱させる！」

「了解！」

エッジは命令を受けてカルナスを急加速させ隕石群の隙間を抜けて行く。

レイミはレーダーから隕石の隙間を計測してエッジとタニスに対して「エイオスに逃げ込むしかない。データを送るわ」と言って送られてきた航路データを元に隕石群の隙間を抜けて目前に見える惑星エイオスに突き進んでいく。

レイミが緊急警報を鳴らして、ディックは機関状況把握すると正常維持に努めようと現場の機関主任に連絡を取り予備の重力発生器を作動させ、タニスが側面からぶつかってくる隕石に対して艦砲射撃で撃破していく。

「逃げ込めそうだ」

エッジがそう呟くとエイオスは見る見る大きくなっていき、船はそのまま大気圏へ突っ込んでいった。

「サイオンジ君！乗組員に警告を」

「この侵入速度だ。減速が間に合っても不時着する可能性があるってみんなに言ってくれ」

グラフトンが乗組員に警告するように命令し、エッジが状況を説明したのでレイミは船内放送で警告を発した。

大気圏内での急減速の衝撃が船内に走り、モニターは迫っていく大陸と海面を映し出している。レイミはレーダーでほかの4隻が同時に大気圏突入しているのを確認していた。

エッジはカルナスを操船して水平に保とうとするが減速が間に合わず海面に不時着しその激しい衝撃が再び船内に広がり、そのまま浜辺に乗り上げた。

「止まった」

エッジはスピードを維持したまま不時着しカルナスが地面にめり込んで止まったことを確認して、息を吐き出した。

隣の席のタニスもしがみついていたコンソールから手を放して、安心したように助かったと声を漏らした。

操舵席から振り返ったエッジは座席から床に投げ出され気を失っているレイミとグラフトンを見て声を上げた。

エッジはまず深呼吸して冷静さを取り戻して、艦橋メンバー全員の状態を確認した。

タニス以外は床に投げ出されて気を失っていることがわかり、タニスにグラフトンを救命キットで手当てさせつつ、船内に異常が起こっていないかコンソールモニターで確認し通信席から船内に指示を発した。

「カルナスは不時着。データ上は船体に亀裂は発生したもののエネルギー異常や火災は確認されていない。動力は停止しているが各班は船内の現状報告を頼む」

「エッジ、船長の意識が戻った。船長、腕が折れてます。動かないで」

タニスが診ていたグラフトンが意識を取り戻して痛みで呻きながらも起きあがりエッジに問いかけた。

「皆は、船はどうなった？」

「どちらも現在調査中です」

簡潔に問いに答えたエッジはレイミの意識が戻ったのを見て駆け寄った。

「大丈夫か」

「私たち、どうなったの？」

「不時着さ。その衝撃でこうなったんだ」

「エッジの操舵は上手いからね」

朦朧としていた意識がハッキリして皮肉を交えた受け答えが出来るとわかるとグラフトンに話しかけた。

「ディックが目覚めません。医務室に運びませんと。船長も診て貰いましょう」

「腕ぐらいでどうってことはない。君は無事のようだな。ともかく状況を收拾せねばならん。艦橋は私とタニスで保つ。情報はインカムで伝えるかモバイルに送る」

「私も大した怪我はないから、タニスだけじゃ難しいでしょうから、一緒にほかの船の情報を集めておきます」

軽傷のレイミが残ると言ったので、エッジは船内の現状確認と対応を指揮するためにディックを連れて艦橋を出た。

4話

エイオスに不時着したカルナスでは、その衝撃で怪我人が続出し混乱状態に陥った乗組員たちが落ち着きを取り戻し自らの責務を果たすために活動を開始していた。

機関部では主任であるサイモン・ロステアがディックの指示通り主機関の正常状態維持に務めて、衝突と不時着の衝撃で異常状態に陥り掛けた主機関を停止状態に落ち着かせることに成功した。

「こちら機関部。主機関の停止に成功。動力は副機関に切り替えて、メンテナンスのために停止を要請する」

報告を艦橋に上げるとレイミが応えた。

「ストラウスは意識不明になり私が代行しています。現在状況整理中ですが機関部が安定したのなら負傷者の手当を優先してください」

「怪我は全員しているが、もしもがあるかも知れんから俺は離れられん。応急手当をしたら自力で医務室まで行かせる」

「負傷者が多くて医療班はラウンジと会議室に。負傷者はそっちにお願いします」

船内の憩いの場であるラウンジは続く会議室と共に負傷者で溢れかえっていた。

医療班長のマサノリ・キムラは重傷者と軽傷者に分け、さらに緊急性の高い者を優先的に診るようにしてこの状況に対処していた。

「ジュン！そいつらの整備が終わったらこっちを手伝ってくれ。アキラはここを頼む」

ほとんどの負傷者は衝撃で壁に叩き付けられての打撲、脱臼、骨折であったが、打ち所が悪く吐血して内臓破裂を起こした者が4人もおり、マサノリは医務室に彼らを運びつつ二人の部下に叫んだ。

「ジュン・オレイラーは脱臼と骨折した負傷者に対して、大急ぎで整備したために、骨接ぎの痛みに絶叫する者が続出。」

ジューンが医務室に行ってしまうと残された負傷者たちにアキラ・ミズキは医療セットを使って丁寧に整復し固定していった。

「ドクター・ミズキ。ストラウスが」

肩を嵌められて腕を吊っているハルが、片手でモバイルを操作しながら簡易ベッドで寝かされていたディックが呻いたのを見てアキラを呼んだ。

「意識が戻ったみたいね。これを見て、うん、大丈夫みたいね。名前と所属を言ってみて」

「ディック・ストラウス、SRF3号宇宙船カルナスの機関監督官」
「大丈夫ね。頭を打って気を失ったのをマーベリック副長が連れてきたのよ。彼はブルド隊長と一緒に格納庫に行ってる。よし、ふらつかなければ大丈夫よ」

アキラはディックに呼びかけてペンライトで眼に光り当てて意識確認を行い、計測器で脈拍も正常だと判断すると次の負傷者の手当に向かった。

「フルブライトさん。僕はどれぐらいこうしてましたか？」

「三時間だ。私も状況整理中で動けない。機関部はロステアたちがよくやってくれたようで大した被害はないようだぞ」

「そうですか、なら艦橋に戻ります。上がいないと下の連中というのは不安になりますから。あー、サイオンジか、目が覚めたから艦橋に戻る」

そう言うとディックはインカムで連絡しつつ艦橋に戻って行った。

エッジとダフは倉庫の点検を終わらせて艦橋に戻った所だった。

不時着の衝撃でもっとも危惧されたのは武器庫からの出火である。全て大気圏突入を想定してムーンスペースから固定されたままだったので被害はなかったが、その確認作業は武器庫から食料庫、格納庫など倉庫全てに及び時間が掛かっていた。

艦橋では、ディックはモニターで機関部に指示を出していた。タニスは外部の大気調査を進めており、レイミは他の船に対して交信を

続けていた。

グラフトンはアキラに腕の治療をして貰っている途中で二人に話しかけた。

「倉庫に異常はなかったようだね」

「はい。やはり固定されたままだったことが幸いしたようです」

「船体が損傷するほどの衝撃だったのに、大した被害はありませんでした」

「こいつの腕が良かったんですよ」

タニスが手を止めてエッジを讃えるとエッジは幾分気落ちした感じで答えた。

「それでもあの怪我人の多さを見れば完璧とは言えませんよ」

「ベストを尽くしたなら弱音を吐くな。ミスを犯したと思われる」

「わかっています。ですが、ゲイルが死にましたから」

「保安部の彼ですか。首が折れて即死でしたから私たちも手の施しようがありませんでした。ですが亡くなったのは彼だけですから運が悪かっただけです。気を落とさないでください」

エッジの言葉にダフが戒めを言いアキラが励ましてくれたが気分の晴れないエッジにグラフトンは続ける。

「マーベリック君。みんな、君の腕を知っているから信頼して命を預けている。その信頼に応えて最高の仕事を続けることだ」

「そうよ。みんな、覚悟してこの船に乗ってるのだから、元気出して」

レイミにも励まされたことでエッジは自分が周囲に迷惑を掛けているとわかって恥ずかしくなったので話題を変えようと謝った。

「あつと、ごめんなさい。愚痴っぽくなっちゃって。レイミ、ほかの船とは連絡取れたの？」

「ええ。連絡は取れたわ。どこも似たり寄ったりみたいだけど、エレミアだけは連絡が付かないの」

「まだ我々も状況収集中でな。負傷者の手当も続いている。態勢が整のうまでは動けん」

カルナスの乗組員は各自が果たすべき役割を果たすことで状況を収拾していた。

5話

SRFの宇宙船隊が惑星エイオスに不時着してから6時間後、混乱を收拾し態勢を立て直した宇宙船の船長たちは通信会議を行った。情報共有とこれからの方針を決定するためである。

バレーナとバンデリオンはなんとか生き延びたものの不時着の際に船体が損傷し火災が発生し死者も多数出してしまい動くに動けない状態であり比較的損害の少なかったアキュラはその二つの救援に。カルナスは距離的に他の船よりも近いということで連絡の取れないエレミアを救援することに決定した。

幸いにして5隻の宇宙船が不時着した半島は地続きで行けることがわかり、また大気解析の結果、大気構造が古代の地球とほぼ同じで呼吸しても人体に支障がないレベルであり活動可能であることが判明し戦闘要員を搜索隊として編成しエレミアに向かうことになった。

強化スーツに身を包んだ戦闘要員はダフに率いられてカルナスの出入り口から伸びるタラップを降りて地面に降り立った。

SRFの全隊員は戦闘要員として活動できるように訓練を受けているので船を動かす以外では戦闘要員として動くことになる。

しかし、この搜索隊に参加できたのは怪我人が多く8人だけである。だが、戦闘要員たち全員が最初に気になっていたのは4時間歩かなければならないことよりもヘルメットを取って息が吸えるのかということだった。

タニスなどは「大気構造が地球の古代とほぼ同じだからそれで人体に影響がないとは言えないだろう。微生物とか謎の病原菌とかがいたらどうするんだ」と言い出して周囲の意見を代弁していた。エッジは緊張しながらも率先してメットを取って数回深呼吸してみた。

「大丈夫みたいです」

異常がないのを確認するとダフたちもメットを外した。

異星の空気を吸うということは計測されてわかっていたこととはいえやはり緊張と躊躇を必要したのである。

だが、タニスが風で前髪が揺れたことで「良い風だな」と言ったことで全員に衝撃が走った。

「風が、ある、か」

ダフも感慨深げに呟いた。

「レイミ！聞こえるか、ここ、風が吹きっぱなしだ」

カルナスから戦闘要員をサポートする通信士のレイミにエッジの興奮した連絡に困惑していた。

「えっ？大気のある惑星なんだから風ぐらい吹くんじゃないの？」

「その風を肌で感じられるんだよ。地下や船内の空調機の生暖かいのじゃなくて、こう、気持ちが良いんだよ。空気が違うんだ。生きている風なんだ。これが風が吹くってことか。それに地下の植物園の草木とは大きさが全然違ってでかいな」

皆がひとしきり感動を堪能しているとレイミが水を差した。

「みんな、船の前から動いてないけど、早く出発してくださいね」

強化スーツを纏ったダフたち捜索隊は浜辺を北に走っていく。

エレミアは海岸線に不時着していることがレーダーで判明している。

カルナスが海岸から森林地帯に突っ込んでいたので、削られた地面を辿って海岸線まで戻ってから進んでいた。

全身を覆い身体能力を数倍させる強化スーツは宇宙、水中も活動可能な全環境対応戦闘服である。

その数倍の身体能力によって高速で走っていた。

エッジも例に漏れず海を初めて見た隊員も多く、純粋なモンタナはその代表で風の時と同じく初めて見る水平線に感動して度々移動が中断したせいで景色に眼を取られぬように走らされてしまったので

ある。

「サイオンジ、この方向であっているのか、海岸線には船影も何も見えないぞ」

搜索隊はすでに2時間走り続けており、100キロ近く進んだが何も確認出来なかったのである。

「信号はそこから5キロ北の地点から確かに発信されています。障害物がなければ視認出来る距離のはずです」

レイミに確認を取ったダフは、北に続く海岸線に目を向けても人工物は発見できなかった。

あれだけ大きな人工物が見えないとは思えず、通信に応答がなかったことから墜落した際に故障したか、あるいは墜落で爆散したかと考えるが、爆発に類するものは確認出来ないために否定した。

「エレーミア、見えませんね」

「ああ。まず状況の確認が優先だ」

よそ見をするので傍を走らせていたモンタナとそんな話をしているとモバイルが示す信号発信地点に走ったために予定より早く到着してしまった。

「ここだ。全員止まれ」

ダフの号令で止まった探索隊は、タニスなど体力の少ないものは息を切らせて呼吸してしているが、ダフやエッジは汗こそ噴き出してはいたが呼吸を整えて周囲を観察していた。

「ブルド隊長。ここのはずですよ。どういうことなんでしょう？」

エッジがモバイルで周辺地図を確認し拡大地図で信号が探索隊が立っている地点から発信されていることに訝しんでダフに問いかけた。

「俺にもわからん。最悪、墜落を考えていたが、残骸もないとは」
信号発信地点は海岸線と浜辺を分ける完全な陸地でほかには数メートル下れば海があるだけである。

「墜落するまま埋まったんじゃないでしょうか、それで地中にある残骸が発信を続けているとか」

とりあえず周辺を搜索したが残骸すら発見できず、モンタナはそう

発言したが、9時間で宇宙船の墜落で出来た穴が綺麗に塞がるのかとダフに反論されると周辺が掘り返されたことはない自然土であることは見た目にもわかった。

「地上に痕跡がない以上やはり海しかないでしょうね」

「お前もそう思うか。それしかないからな。海に潜るぞ！エッジ、モンタナは俺と来い。後はここで待機しろ。何かあれば連絡する」

「連れて行っちゃくれないんで？」

ダフの命令にさっきまで息を切らせていたタニスがようやく体力が回復して軽口を叩いた。

「溺れたいなら付いてこい。銃は必要ないと思うがな」

ダフに同行を許されたタニスはエッジらとメットを被って海に潜っていた。

6話

水中では太陽の光が透明な水質の海に差し込んでいて屈折から美しい景色が広がっていた。

その中をモンタナ・ダイトが泳いでいく。

彼はムーンスベース出身で地球に降りたことはなく、ましてや海を見たこと、プール以外では泳いだことなどなく、ただ海の美しさに、透明度も相まって感動しきりであった。

「なあタニス、この海が地球より綺麗だって本当なのか、だって宇宙から見たら綺麗な青に見えたよ」

「見た目だけ綺麗なものなんて一杯あるもんなんですよ。地球の海は綺麗に見えても何十発も核を落としたりやがったものだから生身じゃ泳げないんですよ。表面的に自然が戻たって人体には有害なんですから」

モンタナはコンビを組んでいるタニスに実感した自然の壮大さの感想を述べていた。

「見つけました。大穴の先にエレミア確認です」

インカムから聞こえてきたエッジの指示通り大穴の外で待っていた二人は大穴の内部に向かっていく。

浜辺から海に1キロほど進めばかなり深くなっており、それは墜落の衝撃で生まれたクレーターである。

そのクレーターがかなりの深さにまで及んでおり、墜落の衝撃で斜めに大穴が続いていた。

エッジとダフは先行してこのクレーターを作った原因がある最奥へ進み、タニスとモンタナは外で問題が起これば対応できるように警戒していた。

タニスたちがエッジと合流した地点は、水深は十数メートルだったが、斜めに空いた穴は大きいながらも地上から射し込む光を僅かなものにしていた。

合流したタニスはエッジのヘルメットのライトで照らされたそれが地中深くに埋まったSRF宇宙船に共通する見慣れた後部であることを確認した。

「マイウス、地上は問題ないか？こちらは本命を見つけた所だ」

ダフは遅れてきたタニスたちにヘルメットのライトを付けるように命令しつつ地上に残った副隊長と連絡を取っていた。

「こっちは隊長が潜つてからののかなものです。動物の気配も感じません。カルナスへの定時連絡はこっちでやっておきますが」

「ああ、必要があればこっちから連絡する。」

ダフの連絡が終わると4人はエレミアの後部ハッチから内部に進入を試みる。

「駄目だ。エネルギーが通ってないのか、水圧なのかびくともしない。ぶっ壊しますか？」

「動力は落ちてるのに信号は発信し続けている。ならバッテリーになつてるな。でも、内部が浸水するとまずいしな、まあ隔壁で遮蔽されていることを祈るとするか、やっていいぞ」

タニスはエッジが分析した結果を聞いて了解を得るとレールガンを数回同じ部分に発射して穴を開けてからハッチを動かして進入した。内部通路は破損した外壁から浸水していたために内部気圧の差で吸い込まれるようなことはなかった。

内部は所々浸水し墜落の衝撃であちこちが変形して通路の体をなしていない中でエッジとタニスは艦橋を目指したが、艦の前頭部は潰れておりその潰れた艦橋機器が識別信号を発信し続けていたことが判明しただけで船長以下のスタッフの生存は絶望視した。

ダフとタニスは機関部が完全に停止していることを確認するとエッジとタニスも合流して生存者を搜索した。

エレミアの乗組員はすでに発見していた。だが、ある者は落下の衝撃と変型した壁で潰れ、ある者は浸水で溺死していた。

モバイルに搭載された簡易生体走査範囲を人体に限定して生存者を搜索していたが、死体ばかり見つかることにタニスは毒づいた。

「一人ぐらい生きている奴はいないのか」

船が違ふことから親しく付き合うことこそなかったが、顔見知りであり共にSRFの任務に従事する仲間である。それ故に生存者を見つけれない無力さに苛立った。

「墜落からまだ10時間だ。これだけ船体が残っているのだから可能性はゼロじゃないはずさ」

エッジにそう励まされてタニスは救助が来たことを告げるために大声を出して居住区画を搜索した。

その時、コツコツと規律正しい音が断続的に響いたのを感じたモンタナが周囲を静かにさせて生存者がいることを確認した。それは変型した個室からであった。

「SRFの緊急コードです。通信器が使えたら中の状況を伝えてください。駄目なら一回鳴らしてください」

モンタナの問いに一度だけ返つてくると、その後何度か質問してほとんど埋まつてしまい動けないこと、浸水していないため生き残れたことが分かり、水没した格納庫から使える工作機械を持ち出して、手順を決めて救出に取り掛かった。

変型した扉を破壊してすぐさま内部の瓦礫を撤去して行つた。

海水が膝までしか侵入していないことが幸いし溺れる前に助け出すことに成功した。

助け出したエレミアの乗組員の女性は、かすれた声でジユデイス・バルダーンという書記官だと名乗った。

長時間の体が圧迫された状態にあり肺も潰れているのか、そのため息がし辛い状況が続き会話も満足に出来ないでいた。彼女は呼吸器で呼吸を助けつつモンタナが面倒を見ることになり、エッジ、ダフ、タニスはほかの生存者探しを続けるために居住区のほかの部屋を見て回るために出て行つた。

残ったモンタナはジユデイスに各船の状況を説明して現状把握をさせることに務めていた。

「エレミアがこの状況なので脱出していただくことになります。予備の強化スーツがありますし、我々が手を引きますので脱出の心配はいりません」

「そうですか。乗組員データは共有しているし私物もありません。あとは仲間と一緒にすることが出来れば良いですけど」

ジューデイスが喋り辛そうに受け答えしていると通信器からダフの声が聞こえた。

「もう一人見つけたぞ。食料庫だ」

「こいつ料理人か？」

「案外、盗み食いじゃないですかね。どっちにしても無傷なのに通信器も持たず閉じ込められっぱなしなのは間抜けというか運が良いというか、でも生存者2名。来た甲斐がありましたよ」

食料庫で眠っていた男を見ながらダフが口にした疑問にタニスは茶化して答えた。

閉じていた扉のほとんどは墜落の衝撃で歪んで開かず、人工栽培で作られ積み込まれた食材がそこら中にぶちまけられ、それを片付けようとした跡が見られるが、それも飽きたのか寝ていたのだった。その男の相手はエッジがしており、ダフとタニスは遠巻きに見守っていた。

「本当に助かりましたよ。閉じ込められて死んでいくだけだと思いましたが。書記官補佐のダック・ダリーです」

7話

「ダツク。あなただけでも無事で良かったわ」

「バルダーンさんもよくご無事で。墜落してから誰も人が居る気配がないからこのまま死んで行くんだなって思いましたから、本当に無事で良かったです。助けてくださったカルナスの皆さんも本当にありがとうございました」

エレミアの生存者が二名しか見つからなかったため、もう出来ることもなくなったので脱出のためにジューデイスの部屋に集まった際に二人は上司と部下らしく九死に一生を得た再会に感動していた。特にダツクは無傷なこともあり大喜びしていた。それは生き延びられた嬉しさで仲間たちの死の悲しみを忘れようとする一時の空元気であり、放置されたままの仲間の遺体を見ると誰々でこんな奴だったと思い出話をして半分水没し移動も困難なエレミアでは遺体の收拾もままならず放置するしかないと思うとやりきれなさを感じて静かになっていた。

エレミアで二人生存者を見つけたという連絡を受け、それをカルナスに伝え、ダフたちの帰りを待っていたマイウス・タイラー副隊長らはエイオスの現地生物と遭遇していた。

咆哮を上げて襲いかかってくる十数メートルの巨大な動物。有り体に言えば恐竜である。それも肉食の。

最初は深い森林から咆哮が聞こえ、巨体が大地を踏み締める足音がこちらに近づいて来るので完全に警戒体制を取っていたマイウスたちはレールガンで距離を取って迎撃し射殺に成功した。

彼らの前には十数メートルのかつて地球上に君臨し、今はもはや人類の前に敗れ去った死骸が横たわっていた。

「あれだけ撃ち込んでも原型を保つとは、最高出力じゃなかったとはいえとんでもない筋力だな。これからは足止めをして頭部を狙う

しかないか。一体だから助かったが複数で来られたらまずいからな」
冷静に戦闘を分析するとモバイルから地図を呼び出し恐竜が現れた
方角、半島の東側は広い大陸に繋がっていることを改めて確認する。
そして、エレミアから生存者を救出し6名となったダフらが海か
ら上がってきたので、事情を説明した。

「サイオンジがブリーフィングで言っていたあれか」

ダフは恐竜の死骸を見つめながら驚いていたが、やはり大量に出血
して死んでいる恐竜というのただ巨大だけでなく獐猛な牙に畏
怖のようなものを感じるようでエッジやタニスも絶句している。

ダフは長々とこの場に居続けることは得策ではないと考えカルナス
に帰投することを考える。怪我人がいる中で戦闘になれば身動きが
取れなくなるからである。移動中の襲撃も有りうるが海岸線では早
期発見し距離が取れるため迎撃は容易い。そこまで考えてからどっ
ちにしても帰らねばならないから夜であろうとも危険度は変わらな
いと思い直して帰投命令を出した。

「任務は終了だ。カルナスに戻るぞ」

カルナスの艦橋ではSRFを代表してグラフトン船長がムーンベ
スにあるSRF司令部に連絡を取っていた。

「では、エイオスでの植民を優先させると」

「そうだ。USTAの決定だ。エレミアを失ったことでエイオス
の拠点化が遅れることは決定的だ。隕石群への遭遇とそれに続くエ
イオスへの墜落。損傷しているがまだまともに飛べるのはアキュラ
とカルナスのみ。単独でも当初の任務は可能だろうが修理は必要だ。
運が悪かった。だがそれでもまだ2隻残っている。方針が変わるわ
けではない。再び飛べるようになるまでの地盤固めが必要なのだ。
エレミアに課せられた任務を4隻で分担してもらいたい。そちら
の体制が整えば増援を輸送することもできる」

司令官との通信が終わるとグラフトンは、「新天地を目指すのは苦
境にあるから一度安住の地を手に入れば誰も危険な旅には出な

くなる。それがわからないわけじゃないでしょうに」と言って、宇宙にある無数の可能性を捜すという流れが確かに変わっていくのを感じていた。

「サイオンジ君。船長たちを呼び出してくれ。方針が変わったことを伝えて、これからのことを協議せねばならん」

8話

草食恐竜の群れが平原を駆けて行く。肉食恐竜から逃げるためである。

これまで人類がエイオスと名付けた惑星ではありふれた光景が今ではもう一つの勢力が参加している。

人類である。

食うか食われるかではない。

ただ排除するためだけの戦闘が始まっていた。

「接近されれば一呑みにされる。距離を取り陣地に近づけさせるな。そして逃げるものは追うな。いいな」

戦闘指揮を取るダフが森の中に急場で作った陣地に控える戦闘部隊の面々へ説明していた。

ダフたちがいる平原を臨める森林から数百頭の恐竜が見える。それは草食竜何千頭かを追う集団であった。こちらの戦力は現在のSRF全戦力の半分である二百人。ダフの指揮下にはカルナスの乗員の半分強である六十人が控えていた。それもほとんどが怪我人で激しい戦闘は行うことができない状況であったが、通信機が各部隊の隊長と繋がり、リーダー情報をモバイルに表示させ、緊密な連携が取れるようになり、遅れを取るなどありえなかった。

「アキュラとバレーナの連中も向こうの森にいる。挟み撃ちにすればこの半島から排除できる」

そう言ってダフはアキュラとバレーナの陣地を指し示した。恐竜たちが侵入してくる方向をある程度予想して横撃を加えるために森林地帯に半円に布陣して十字砲火を加えるためである。

これから始まるのは半包围での待ち伏せによる虐殺であった。

最初に攻撃の口火を切ったのはバレーナの戦闘部隊だった。

バンデリオンの部隊の攻撃で引き離された肉食竜に追われた草食竜

の先頭集団の百頭近い一団が待ち受けている森林地帯に逃げ込もうと接近したためにレールガンの弾を浴びせかけた。それに呼応してカルナスの部隊と後ろ側にいるアキュラの部隊も攻撃を開始した。それを受けた草食恐竜は一瞬で全滅させた。

「肉を食う連中以外も構うな。あんなデカイのはいるだけで脅威になる」

バレーナの戦闘隊長が鼓舞して撃破を命令している。

怪我人が多い中で決行された殲滅作戦は、それでも危険度が大きく激しい戦闘をすることはできず突破されても巨木を盾に出来る森林地帯で待ち伏せするのが精一杯であった。

これから数時間、突入してくる恐竜たちを迎え撃っていく。

「半島東側の恐竜は排除完了しました」

グラフトン船長へ報告を済ませたエッジは森林地帯の前方に肉塊の破片と血溜りを作っている光景に何とも言えない気分となっていた。必要だからやっているのであり開拓には必然の現地生物の排除に憐憫の情を一切持ち合わせなかったが自分たちが赤い血溜りを作っていくのを見て、さらに今回の作戦がさほど成果を上げなかったことでさすがに気が滅入ってくる。

戦闘はレールガンの射程もあり小規模な突入は簡単に迎撃でき、餌である最初に倒された死体を貪る肉食竜は撃破できた。しかし草食竜は脇目も振らずに逃げていくため、数も多く全て仕留めることができず突破した恐竜たちを行かせるしかなかった。

これで半島に侵入しようとした肉食竜のほとんどを駆逐することに成功したが、草食竜の数は当然以前より多くなり、また天敵である肉食竜が存在しないため繁殖力の強い草食竜の制圧には手こずることがこの時点で予想されていた。

肉食竜は八百近い数を倒せたが、草食竜は二千足らずしか倒せず最低でも三千頭以上が半島に侵入した。それでも今回の戦闘では接近戦が起これば怪我人は一人も出なかった。

SRFからの指令が下ったあとの船長会議の結果、エレミアの植民開拓計画に沿って行なわれることとなった。

植民可能な土地の確保。土地の安全の確保。確保した土地の開拓開発。これが大原則で基本要項である。書記官たちが土地を選定し戦闘部隊が警備し開発を主導する。それを船長たちは認め決定する。

特に戦闘部隊は土地確保後の労働力となるため制圧は短期が望ましく手間取るわけにはいかなかった。

墜落したバレーナとバンデリオンが動かさないほど損傷を負っていたためこの半島から開発することになった。

この半島は西側の宇宙船が墜落した付近は入り江が入り組み水場も豊富であり養殖も可能であり、また東側の山岳地帯、森林地帯を除けば平地は広大で外敵の侵入さえ許さなければ数万人を賄える生産力が期待出来る農地と成り得た。

脅威となる恐竜、肉食竜でさえこの半島には千頭以上、草食竜を合わせればその数倍が生息しておりこの戦力で撃破し続けるのは時間を要する。それをさらに困難にする今回の半島に侵入しようとする大集団を阻止する作戦の成否は安定的な安全確保を決定することであつた。

軌道上に打ち上げた簡易衛星からのレーダー情報も生体走査は精度が悪くあまり当てにならない。写真映像も平地などは判別がつくが森林地帯に入られては確実な情報は得られない。

「森に入られたら居場所なんてわからないぞ」

エッジはモバイルのレーダー情報が当てにならず半島の中央部から南に広がる森林地帯に逃げ込んだ草食竜の移動範囲が西側にまで至らなかったこと以外は安心出来る要素はなかったのでこのあとは小規模な討伐と追い込みでまた集団制圧を行なっていくしかないと考えていた。

ダフとマイウスは戦闘後の各部隊と弾薬と装備、負傷者などの状況

確認を行うため動き回り、その間、周囲の脅威がなくなり帰還するまでの時間が空いていた。

周囲を見渡したエッジは死体に近づいているタニスたちが気になったので近付くと森林を伐採して陣地を作るのに使った作業用カッタで肉を切り裂いて、レールガンの電気の火花で火を起こしていた。

「なにやってんの」

「肉焼くんですよ。一度食いたいと思ってましたね。食います?」

「いや。だが、汚いぞ。それに、この前、未知の微生物がどうのつて言っでなかったっけ?」

「洗ったし、よく焼けば大丈夫ですつて。新鮮な肉、しかも人工養殖じゃないのなんて初めてですよ。味見ぐらいさせてくださいよ。」

あつ、モンタナ、落とさないでくださいよ」

肉を切っているタニスの注意は枝に肉を刺して焼いているモンタナに向けられていた。

案の定、よく焼こうとして枝まで燃えて落ちてしまったが、今度は岩を薄く切り出して即席の鉄板を作つて、火力が足りないのでレールガンの電気を流してその上で食べられるよう焼いていた。

エッジは血の臭いがキツイので少し離れたが、肉の焼ける臭いに誘われて怪我人のまま動員され数時間の戦闘で疲れているのにも関わらず周囲に人が集まり出していた。

だが、食べた感想は「あんまり美味くない」「硬いだけだ」「味が悪い」などなど芳しくなかった。

見ていた一人から「そりゃトカゲの親玉を食つて美味しいのかよ」と突っ込みが入ったが、タニスたちは腹が減っていたこともあって諦めず、死体を部分部分で切り取つて、少しずつ食べていき薄く切れば食べられないわけじゃなく、柔らかい部分や種類や肉食草食によつて味が違うことを発見していた。

だが、やはり味は食べ続けたいと思うほどではないようで微妙な顔をしていた。

「まあ、食うに困ったら狩りましょう。そうじゃなきゃ食べる気し

ませんね」

タニスは美味くもない肉の感想を述べたが、そこにダフたちが帰ってきた。

「お前らは、腹が痛くなっても自分で歩けよ。船までは一日掛かる、面倒は見られんからな」

そう言つて帰還する事を皆に告げた。

集まっていた人集りも各々の班を組んで帰り道を進んでいたが、マイウスは即席の鉄板を見て、美味かったのか聞いてきたのでタニスは味の感想を述べていた。

「調味料は何を使った、塩か」

「あー、そうか、そういえば何も使つてない」

そう言つと携帯食料の中の塩を取り出して少し振りかけると味がして随分食べやすくなった。

マイウスも少し食べて「まあ、腹の足しにはなるな」と言つと作業用カッターを使って恐竜の死体から牙や爪を回収していた。

「どれを仕留めたかわからないからな。まあ隊長はこういうのに興味がないから目の前ではやりづらくてな」

その様子を眺めていたタニスに応えて、拳ほどの牙を一つ投げて、それが焼いていた肉に突き刺さつた。

「さて、帰るぞ。置いて行かれるなんて格好つかんからな」

9 話

エイオスに降り立ったSRFは書記官たちを中心に開拓の準備が進められていた。

彼らが最初に行なったのは資源調査である。

衛星を打ち上げ、そこから地理情報を得られるが、今後の開拓計画を左右するため水源、鉱物、森林など資源の正確な数字を算出しなければならぬ。

戦闘部隊は安全確保と同時にこれらの調査を行う。土地確保の前段階である。

これらは地球からの補給がない現地での自給自足体制を確立して行う開拓の基本である。

「医務室から検疫の結果の報告が来ています。未知の病原体などはいないそうです。いたとしても予防接種でほとんど無害化出来ていると。それから自然環境調査も完了です。空気、大地、水、どれをとっても人体に有害な要素は見つからないそうです。早速新鮮な水が飲みたいと浄水器を設置したと報告が来ています。みんな水が美味しいですって評判になってますよ」

ハルは自分の私室兼仕事部屋で開拓計画をまとめながら自分の補佐官となったダックから報告を受けいていた。

「ダック君。読まなくとも端末に文書として送ってくれば読むから」

「読むほどの報告じゃありませんよ。何も出来ることなんてないですから。情報もない、人手もいませんし。戦闘部隊が戻って来ないと何とも」

ハルはダックから送られた報告書に目を通しながら、気になった点を質問していた。

「この地質調査にドクター・ミズキの名前があるが、彼女は生物学

者だろう」

「専門ではありませんが、恐竜の調査のついでにもやってくださいました。やり方はデータベースを参考にしましたから間違いはないと思います。機材もありましたから精度は信頼出来ると思います」

再び文書に目を落としたハルはカルナス付近の土地が農地転用するにはかなりの土地改良が必要である数字が示されていることを確認した。人の手が入っていない自然土であるからであるのだが。

ほかに衛星からの地形や気象のデータが表示されてる。

「君は今後どうしたら良いと思うかね？」

「資源調査の結果待ちではありませんが、農業と工業の生産プラントの設営のために水源の確保が最優先であると思います。エネルギーは船の動力で賄えますし、生活環境も船で生活する分には必要ありません。何を置いても水が必要ですから」

問われたダックは明快に答えた。それはエレミアで当初計画された通りだったからである。

農業用水も工業用水もかなりの量が必要になるため開拓地で水源の確保が最優先であった。

「では、東の平原を農地として確保できたとしよう。しかし近場に水源がないとしたらどうする？」

これもダックは明快に即答した。

「灌漑水路の整備やパイプラインの敷設などで安定して水を引くことは出来るでしょう」

「それを作る設備はまだないが？」

「工業施設が動き出せば設備を作るのにそう時間は掛かりません。現実的ではありませんが宇宙船を動かしての水の輸送というのもあります。ですが水源もしくは輸送手段が確保できなければ開発は難しいでしょう」

ダックは結局の所、水がなければそれを送る設備を作るまでは何も出来ないと言っているのだ。

灌漑作業も装備がなくほぼ人力作業になるため傍の河川から水を引

くの何年掛かるか分からない。

この議論は調査報告が来る前では無意味なものであったが、話しやすいダックとの議論は楽しいものです。つかりハルはダックを気に入っていた。

「良い答えだ。だが、気候に関しての言及がなかったな。まあ長期計測が必要だからな。水のない場合は艦砲射撃で地面に穴を開けて即席の貯水池を作るという案もあると思うぞ。せつかく船で水を運ぶアイデアがあるのだから、雨水を貯めるとか、もっと派手に射撃で地形を変えて水を引くのもありだぞ」

ダックは考えが足りなかったと思ったが、「雨季の期間や砲の威力がわかりません」と反論した。

ハルは少し笑った後で次の議題を出した。

「工業施設と言ったが、まだどこに作るのかということも決まっていない。これも鉱物資源がどこにどれだけあるのかということが分かっていないため輸送手段が限られている現在では決められない。君ならこの決められない状況でどこに施設を設営する？」

「決められない中で、決めるというのは条件を無視する自由があることです。賭けみたいものですな」

「そう。状況が分かれば最善を選ぶことも出来るが、分からなければ損をするだけ。しかし選んではいけないわけじゃない」

「私は海岸線に候補を挙げます。具体的な位置は示せませんが、工業用水は海水で賄えます。それこそ無限ですから」

ダックはやや考えてから結論を出した。

「まあ、合格だな。海岸線は水が使えるが、水を引けばどこでも良いわけだからな。資源調達地点に近いほうがより良い。少ない情報から最善を選ぼうとしたな」

答えに満足したハルはまとめていたデータをダックに見せた。

「これは、2年ですか。参考データも随分悲観的ですな」

ハルがダックに見せたのは現状から自給自足体制が整うまでの試算データだった。

「ここに来る前までは最高に上手く行かなくても半年以内で可能だとされていたことが2年掛かる。それでもまだ最低には程遠い。土地の質如何では飢え死にも有りうる。古代の狩猟民族に逆戻りして恐竜を追うかも知れないぞ」

ハルの言い方には議論していた楽しいな雰囲気は消え不機嫌さが含まれていた。

データを見ていたダックはその原因がエレミアの開拓機材全てを失ったからだと理解した。

元々ほかの4隻はエレミアの惑星開拓の初期段階を手伝うという補助的な役割しか課せられていなかったのでエレミア1隻に劣るのだった。宇宙開拓を目的とする4隻とは装備が違うのだ。

「これをどうにか短縮したいと思っている」

「資源調査の結果で修正があるでしょうが、この状況では本国からの救援、増援を待つ以外では開発速度を上げることは難しいですね。アキユラとカルナスは修理しなければ大気圏外の飛行出来ませんから、地道にやるしかないですね」

「やはりそうか。まあそうだろうな」

事実を確認して落ち込み気味なのを見たダックは少し茶化し気味に励ました。

「先が見えているとやはりそういう気分になりますか」

「まあ、僕はそういうのが嫌でここに来たからね。気分転換に散歩でもするさ。ここは自然を体感出来るという意味では地球とは比べ物にならないからね」

「私なんかはここにこうして生きていられるだけで未来があると思つて感謝しますよ。10年、20年掛かったってここには未来があります。気長に行きましょう」

「君は楽天的だね」

そんな話をしていると艦橋から通信が入ってきた。

「フルブライトさん。戦闘が終わりました。帰還するのにもう一日掛かるようですが、当初の目的は果たせたようです」

「そのまま戻るのか。死人は出たのか、無事なら資源調査を頼みたかったのだが」

「いえ、接近戦はなかったので。平原はアキュラの人たちがやっていますけど、退治しきれなかった恐竜もいるので、怪我人をこれ以上戦わせるのは危険だとして戻ってくるようです」

「必要だったからだが、無理して戦闘に出たからな」

「あつ、待ってください。ブルド隊長からの報告が上がってきました。そちらに送ります」

「ありがとう」

レイミからの通信を切ったハルはダックに報告書を見せながら「この半島での人類の勢力圏が決まったよ」と嬉しそうに言った。

10話

東の平原で恐竜退治を行ってから一ヶ月が経った。

アキユラが河川をせき止めていた船体を動かして平原を水浸しにしていた水が引いていく。

水が引くとアキユラの砲塔が火を吹いた。

砲撃が平原に溝を作り水が流れていく。

「船長。用水路、完成しました」

船長席に座るクロウは、オペレーターの報告を受けて指示を出した。
「アキユラで平原を大陸側から封鎖する」

地上に降り立ったアキユラの乗組員たちは土地に栄養が十分に行き渡っていることを確認していた。

「森林地帯の栄養が流れ込んでるからやはり水が良いですね」

「さあ、みんなが飢え死にする前に開墾作業を始めるぞ」

山岳部に移動したカルナスは資源を掘り出して工業化を進めていた。原材料が見つかれば道具制作システムである程度生産可能な施設を作ることになった。

「やはり簡易高炉を失ったのが痛いな」

ハルは手作り同然の工場から報告された作業結果を確認していた。資源は豊富に産出されるため心配はないのだが、生産される製品の質や量は低く僅かなものだった。

増産体制は続いているが、生産設備が変わるわけでもないので大きく増大する事はない。エレミアに搭載されていた開拓機材があればもっと大掛かりなものが作り得たのに。

ハルの処理すべき問題は、この生産能力をどう使うかである。

高度で複雑な行程を必要とする製品は作れない。部品は作れても動力部部分など複雑なものは時間が掛かって作れないのである。とは

いえ方々から簡単な加工製品でも寄越して欲しいと催促が来ている。西の海岸線ではバレーナとバンデリオンが共同で水産資源の確保を目指して海洋開拓を始めており、入り江の封鎖のための機材などの要請が来ている。

東の平原ではアキュラが農耕地を作るために開墾を開始しており、農具やら輸送機材が欲しいと連絡が来ている。

南の森林地帯の恐竜討伐を行う戦闘部隊からは封鎖を行うための機材を要請してきている。

これに増産も必要なのである。

「欲しい物を欲しいだけ、なんて無理なんだがね」

「どれも時間を掛ければ成果を上げられます。ですが優先すべきは食料生産だと思います」

「あの、バルダーンさん、本来はあなたが統括するはずだったので、すから、それに先任ですから、せめて敬語はやめていただけませんか」

ハルより一回り上の実績も立てているジューディス・バルダーンは船を失ったので助けられたカルナスに間借りしていた。彼女は本来なら開拓計画を主導する立場にあつたのでハルは恐縮してしまうのである。

怪我の療養中に、各船それぞれが動き出していたので体も全快してないため補佐役に徹することにしたのである。

「すでに決めましたでしょう。グラフトンの指揮下なら動きやすいですし、この体では激務にはとても耐えられませんから」

連絡も移動も杖を突いている程度では支障はないのだが、そう言われてはこのまま仕事を続けたいハルは断ることは出来なかったのである。

「ダック。各種連絡を頼む」

ハルはバルダーンの意見を汲んでアキュラやバレーナに対しての要求に応じることにした。

「駄目らしいです」

森林地帯で封鎖の資材が来ないことをモンタナは皆に端的に説明した。

「現地でどうにかしろってことか」

牙や爪の戦利品を着飾るマイウスは、この状況を楽しんでいた。地球では地上での無人兵器掃討任務ぐらいしか戦うことはなかったが、ここではヘルメットが外せ狩った獲物の血の臭いも感じられ、食うこともできるため血がたぎるのである。

「糞が肥料になるから全滅させないことになったが、どう封じ込めるかが問題だな」

森林地帯から出てこないように入口を固め、打ち払っているだけだったが、今回はダフが外れて指揮官はマイウスが担当していた。

「もう散々追い散らしたのだから近場にはもういないはずだ。いつも通り固めるだけで良いんじゃないのか、その案を考えよう」

「はず、だろう？ マーベリック副長。おまえの案が却下されたのだ。どうせ人手を警戒に割くなら打って出るべきだと思うのだよ」

「狩りがしたいだけだろうが」

「否定はしない。だが、やっても文句はあるまい。数を減らせれば船への危険度は低下する。攻撃出来れば例え撃ち漏らしてもさらに奥深くへ追いやる事が出来る」

「そうなる前に攻撃を受ける危険が高い。敢えて危険を冒す理由はあるのか」

「生態調査の一環だよ。どこにどれほどのいるのか分かれば対策も立てようがある。情報を集める意味でも入る意義はあると思うが」

「いいだろう。今回、僕はお目付け役だ。せいぜい誰も死なないように警戒を頼むぞ」

この言い分をエッジが認めたために戦闘部隊は森に入ってしまった。

「また勝手に。やることは一杯あるのにどうして狩りに夢中になれるのかしら。エッジも止めに行くとかとか言って結局一緒にやって

るし」

レイミがボヤいたのはこれが初めてではなかったからである。南の森林地帯から恐竜が出てくることは幾度もあったのでその迎撃が行われていた。足音や生体走査などがあるとはいえ数は圧倒的で入口を固めていたのである。

しかし、幾度かの戦闘の後は恐竜がめつきり姿を見せなくなったので、警戒は一部の者のみとなり生産活動に専念することになったのだが、調査だと言って森に入りたがる者がいるのである。

娯楽として自然豊かな大地を自由に歩けることではしゃいでいるのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8363w/>

星海に希望を

2011年11月4日11時17分発行